児童期の子どものうその理解

○林 創¹・米谷 嶺² (非会員)

(¹神戸大学大学院人間発達環境学研究科・²倉敷市立西阿知小学校)

キーワード：うそ・認知発達・児童期

Elementary school children's understanding of lying

Hajimu HAYASHI¹ and Ryo YONETANI²*

(¹Graduate School of Human Development and Environment, Kobe Univ., ²Nishiachi Elementary School)

Key Words: lie, cognitive development, childhood

問題と目的

これまで、子どものうその発達は、「うそをいつ頃からつけるようになるか」と、「うそという概念をいつ頃から理解できるようになるか」という両面から研究が進められてきた (e.g. Talwar & Crossman, 2012)。後者については、ピアジェ (Piaget, 1932) が道徳判断の研究の中でうその発達にも着目した。その結果、7 歳くらいまでは、発言が現実から離れるほど悪いと判断し、ありえない誇張や、単に間違っただけでも、事実と違う発言はうそと判断される傾向が見出された。

ピアジェの報告は、Wimmer, Gruber, & Perner (1984) の実験的な研究などからも部分的に支持されている。たとえば、男の子には女の子を欺こうとする意図がないにもかかわらず、結果的に男の子が誤った情報を伝えたことになった場合も、4～6 歳頃の子どもの多くは、「うそ」と判断することが報告されている。しかし、意図や道徳判断は正確で、このお話と比較して、結果的に男の子が女の子に正しい情報を伝えたが欺こうとしていた場合の方が意地悪だと判断できた。

本研究では、Wimmer et al. (1984) を参考に、課題状況をさらに統制することで、児童期の子どものうその理解の発達を検討することにした。

方 法

調査対象者 岡山市の公立小学校の 1 年生 51 人と 4 年生 44 人、および大学生 75 人の計 170 人を対象とした。

課題 Wimmer et al. (1984) を参考に、以下の 4 つの課題を用意した。課題 1 では、男の子が女の子に正しい情報を伝えようとして、実際に正しい情報となるお話であった。課題 2 では、男の子が女の子に正しい情報を伝えようとするが、実際は誤った情報となるお話であった。課題 3 では、男の子は女の子に誤った情報を伝えようとするが、実際は正しい情報となるお話であった。課題 4 では、男の子は女の子に誤った情報を伝えようとして、実際に誤った情報となるお話であった。各課題で、6 コマのイラストを用意した。また、各課題で、内容理解質問、意図確認質問 (「意地悪をしようとしたか、やさしくしようとしたか?」選択肢は「わからない」を含めて 3 択)、判断質問 (「うそをついているか、ついていないか?」選択肢は「わからない」を含めて 3 択)、行動予測質問 (「女の子は、男の子の言った通りのことをすると、どうなるか?」選択肢: 喜ぶことになる/悲しむことになる/わからない) を用意した。

手続き 小学生はクラス単位で、お話と質問を順に読み上げ、児童全員が同時に進めるようにした。大学生には、個人のペースで進めてもらった。

結 果

内容理解質問と意図確認質問 内容理解質問と意図確認質問について正答率を算出したところ、1 年生においても正答

率が概ね 95% 以上であった。学年間に大きな差はなく、課題状況の把握に問題はなかったと考えられる。

判断質問 次に、内容理解質問と意図確認質問の両方に正答できた場合を対象に、うそをついているかどうかの判断質問の正答率を算出した結果を Table 1 に示す。学年間で正答率に差があるかどうかを調べるためにカイ二乗検定を行った結果、課題 2 と課題 3 において有意な差が見られた (課題 2: $\chi^2(1) = 11.45, p < .01$ / 課題 3: $\chi^2(1) = 7.36, p < .05$)。

行動予測質問 行動予測質問における正答率を算出した結果、4 つの課題のすべての学年で正答率は 90% を超えていた。

Table 1 うそかどうかの判断質問の正答率

	課題 1	課題 2	課題 3	課題 4
	うそを ついていない	うそを ついていない	うそを ついた	うそを ついた
1 年生	96%	69%	71%	100%
4 年生	98%	88%	74%	100%
大学生	100%	93%	90%	99%

考 察

以上の結果より、本研究でも小学 1 年生ですでに行為者の意図を把握し、行動予測質問から結果の予測もできているが、行為者の意図と結果が食い違う場合に、うその概念の理解が大人と少し異なることが確認された。具体的には、行為者が正しい情報を伝えようとしたが、実際は誤った情報となった場合 (課題 2)、1 年生では「誤った情報となったという結果」に沿って「うそをついた」と判断する割合が比較的高かったが、4 年生では大人と同様に、多くが「うそをついていない」と判断した。これに対して、行為者が誤った情報を伝えようとしたが、実際は正しい情報となった場合 (課題 3)、4 年生でも 1 年生と同様に「正しい情報となったという結果」に沿って「うそをついてない」という判断する割合が比較的高く、大人との間にズレがあった。

このことから、児童期はうその概念の理解が大人に近づいていく過渡期で、意図と結果にズレがある場合は、とくに結果がネガティブなときに、うそかどうかの判断がより早期に大人の判断に近づくことが示唆された。

引用文献

- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. New York: Free Press.
- Talwar, V., & Crossman, A. M. (2012). Children's lies and their detection: Implications for child witness testimony. *Developmental Review*, 32, 337-359.
- Wimmer, H., Gruber, S., & Perner, J. (1984). Young children's conception of lying: Lexical realism-moral subjectivism. *Journal of Experimental Child Psychology*, 37, 1-30